

今治歴史散歩

大 成 経 凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第25回は、今治でタオル製造が始まった頃の綿業界の動向を紹介し、明治・大正期の機業家たちの軌跡を歴史散歩したいと思います。

第25回 今治タオルこぼれ話

●今治タオル前史と矢野七三郎

藩政時代に今治地方の特産物であった白木綿でしたが、明治10年代後半になると市場で勢いを失っていました。これを憂う矢野七三郎が紀州から綿ネル技術（染色・起毛^{きもう}）を導入し、興業舎を組織して事業に着手するのが明治19（1886）年3月のことでした。早速、翌年に軍需用の綿ネルを受注しますが、社主の七三郎が同22年12月に兇盗^{きょうとう}に襲われ亡くなってしまいます。

これを明治25（1892）年に継承したのが柳瀬家で、興業舎は丹下辰雄支配人（丹下健三の伯父）のもと、その資本力を活かして今治綿業界を牽引します（明治40年に株式会社に改組）。一方、村上熊太郎も明治29年に村上綿練合資会社を設立し、七三郎のもと職工だった岡田恒太や宮崎儀三郎（現、みやざきタオル(株)）も、独立して伊予ネルの製造販売に尽力しています。

●今治タオルの創始と阿部会社

今治綿業界で興業舎との双壁で知られたのが、明治29年に阿部兄弟が創設した阿部合名会社でした。同社は綿ネル製造を主業としながらも、長兄の平助は同27（1894）年12月からタオル製造も試みていて、弟の光之助は今治政財界に君臨して伊予綿練^{めんねる}同業組合長にも就任しています。

光之助子孫に伝わった阿部会社の資料によると、明治30年上半期決算の売上高は1万7760円64銭9厘で、このうち綿ネルを中心とする反物売上が全体の50%を占めています。タオルは売上高全体の9%ほどで、その他屑糸^{くずいと}売上・原糸小売と続きます。タオルは駆け込み需要があると生産が追いつかない状況にあったようです。同社は明治31年に大阪支店を設け、同33（1900）年に蒸気機関を利用した力織機^{りきしょつき}を今治で最初に導入し



堀端にあった阿部会社工場

（『富の今治』（長谷川義一編／大正4年11月発行）

※阿部平助が「今治タオルの父」と称されるのに対して、光之助は「今治商工業の父」とも称される。

ています。大正2（1913）年に阿部株式会社に改組すると、^{ようざらし}洋晒移行にともなう最新設備の導入などで、同5年でタオル製造はやめてしまします。

●今治タオル同盟会の創設

今治地方でタオル製造が盛んになるのは大正初期からでした。麓^{ふもと}常三郎（大三島出身）の改良織機に代表される、製織の改善が大きく影響したようです。今治織物同業組合の『組合沿革誌』には、大正2年以降のタオル生産量の統計データが見られ、同4（1915）年に初めて中国の満州・関東州へも輸出されたようです。大正4年の営業者数は25で、翌5年には47に増えています。

こうした中、今治地方最初のタオル同業者組合「今治タオル同盟会」が大正4年に誕生

します。発足時のメンバーは中村忠左衛門（現、中忠(株)）・山本紋治・笠崎基・小澤峰一ら15人で、その中心人物が富本合名会社の麓常三郎でした。その後、しだいに白木綿や綿ネルからの転業者が相次ぎ、生産性を高めながら、高度な紋様を織り出す技術革新が進んでいきます。今治で初めてタオル製織の力織機が備わるのが大正7年で、ドビー織機は同8年、ジャカード織機は同15（1926）年のことでした。

麓常三郎が考案した改良織機の広告
(海南新聞／明治40年5月7日付記事)

※「二挺箴^{にちようおさ}ボタン」とも称され、同時に2列の製織を可能とし、今治でタオル生産が増える原動力ともなった。



藤高商店春季慰安会
(矢野七三郎像前で昭和10年3月撮影／(株)藤高所蔵)

※平成31年で創業100周年を迎える今治タオルメーカー老舗の藤高も、大正8年創業時は主に綿ネルを製造し、同10年頃から本格的にタオル製造を始める。